身体能力チート貰っても転生先が超次元だったら意味ないだろ！

村岡8bit

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

身体能力チート持って転生したと思ったら転生先が超次元だった男の話

エターです。余計な設定いろいろ削いでリメイク予定。

目次

君の人生終わりね。あ、来世は超次元だからｗｗｗ ―― 1
君のヒロイン決まりね。あ、ＴＳ転生者だからｗｗｗ ―― 7
熱血部長と新入部員。副部長は俺。あとエーススストライカーも俺だっつってんだろ！ ―― 13
特訓、それすなわち特訓 ―― 18
どいつもこいつも超次元なやつばかりで俺は泣きそうだよ。それと転校生 ―― 26
日本一に勝たなきゃ廃部ってマジ？マジですか。そうですか。ふざけんな。 ―― 31
ｖｓ　帝国学園　前編 ―― 37

君の人生終わりね。あ、来世は超次元だからｗｗｗ

幼い頃から、サッカーが大好きだった。
当時５歳、プロとして活躍する父さんに憧れて、サッカーボールとスパイクを買った。
多忙を極める父さんに、なんとか時間を取ってもらってサッカーを教えてもらった。

『俺のシュートは大地を抉り雲を裂き海を割る！日本のエーストライカーとは俺のことだ！』
『かっけー！ねぇねぇ、おれも父さんみたいなシュートうてるかなぁ！』
『ハッハッハ！お前ならきっとできるさ。なんってったて、この俺の息子なんだからな！』

ビシッと決めポーズを取る父さんとはしゃぐ俺、なんともまぁ頭の悪――――微笑ましいやりとりだ。血は争えないってやつかな。
多分、この頃が一番サッカーを楽しんでいたと思う。この頃は、ボールを蹴ることがただただ楽しくてしょうがなかったんだ。

小学校に入ると、父さんはさらなる活躍のため海外へと旅立ち、俺は地域のサッカークラブに所属した。
中休みと昼休みの時間は必ず校庭に出て、幼なじみのバカとサッカーをしていた。

『おれのシュートは大地をえぐり雲をさき海をわる！くらえ！どりゃあああ！』
『ぜったい止める！うおおおおおお！』
『うわー男子がまた変なことにしてるー。あっちいこー』
『いこいこー』

毎日のように馬鹿なことをやって女子から引かれていたことも、今となってはいい思い出だ。

中学校に上がると、父さんは全盛期と言われるほどに目覚ましい活躍ぶりをみせ、俺はサッカー部に所属した。

全国大会を夢見て、幼なじみのバカと他の部員達と共に練習に励む日々だった。

『大地を抉り雲を裂き海を割る俺のシュート、とお前らがいれば全国だって行けるはずだ！やるぞ！』

『おー！』

そんな青春の1ページ。今の俺たちならなんでも出来るって思ってた。それこそ全国大会優勝とかを本気でやれる気でいた。

まぁ実際はそんなことあるはずもなく、地区予選二回戦敗退。

弱小校のテンプレじゃねぇか、同級生からはそうツッコまれた。全く手厳しい。

高校に上がると、俺はサッカーをやめた。父さんは未だ現役選手として海外リーグを荒らし回っている。

自信満々で挑んでおいてあっさり負ける。そんな経験をしたらプライドがバッキバキにへし折れることもおかしくない。

『サッカー？んなもんもうやめたよ。おい、さっさと行くぞ』

『う、うん！』

俺はやさぐれた。結果が出ないサッカーなんてやってられっか、って。マジで馬鹿野郎だよ。

幼なじみのバカはそれでも着いてきてくれた。ホントいいヤツだった。愛すべきバカってこういうヤツのことを言うんだなって。

◆

とまぁこんなかんじで俺に人生大雑把に振り返ってみたのだが……うん。やっぱ俺サッカー大好きだわ。

「……なんでやめちまったんだろうな」

「……何が？」

つい口から後悔の念が溢れた。隣で俺と同じ体勢、大の字で寝そべってるバカが聞いてくる。

「サッカーだよ」

「あー……高校入ってからやめちゃったもんね」

腹部辺からじわじわと温かいものが広がっていっている。うへぇ、気持ちわりい。

バカの方に目をやると、腕はひしゃげ、白かったYシャツは赤黒く染まっている。しかし、大した驚きはない。

そりゃそうだ。俺たち二人揃って、トラックに跳ねられぶっ飛んだんだから。

奇跡的に着地点が同じだった事は不幸中の幸いというべきだろうか。いやもうすぐ死ぬだろうから幸せなわけないんだが。

「なぁ」

「何？」

「もしもの話してもいい？」

「いいよ。でも死にそうだから手短にね」

「笑えない冗談はよせよな……。　……もしも俺に来世があったらさ、もしこのあと白い空間で目を覚まして神っぽいジジイに出会ったらさ、身体能力チートもらってサッカーアニメの世界に殴り込みをかけようと思ってんだよね」

少しの沈黙が流れる。数秒後、バカがため息をついてから口を開いた。

「……君って馬鹿だよね。思考がシンプルに馬鹿」
「ハァ？どの口が言ってんだよ。補習常連の癖に」

確かに、とはにかんでみせるバカ。その童顔にはよく似合ってる。

「……俺のシュートは大地を抉り雲を裂き海を割る、くらえー、つって原作キャラ共のド肝を抜いてやんのよ。父さんが海外の奴らにやったようにさ」
「……そっか。やっぱり、君はサッカーが大好きなんだね」
「そりゃそうよ。……てかやべぇ、そろそろ死にそう。視界暗くなってきた」
「同じく。もう体の感覚ないや」
「……本当に来世があって、俺もお前も仲良く同じ世界に転生できたらさ、また、サッカーやろうぜ」
「……うん。約束ね」
「あぁ、約束だ」

その言葉を最後に、バカは死んだ。俺ももうじき死ぬ。
なんだかんだ悪くない人生だったとは思う。後悔はありまくるが。

「……あぁ……死……ぬ……」

それじゃあ神様、転生先はサッカーアニメの世界で、チートは身体能力でお願いします。

◆

ここはとある河川敷にあるサッカーコート。
俺は、黄色を基調としたユニフォームを着た少年たちがサッカーの練習をしているところをベンチに座って眺めながら顔を顰める。
（いや、確かにそうは願ったけどさぁ……）

「行くぞ円堂！ドラゴンクラッシュ」

ピンク頭のいかつい少年が放ったシュートは、それに伴って顕現した手足の無い青い龍と共にゴールを捉え一直線に突撃する。

「絶対に止める！ゴッドハンド」

それを迎え撃つのはオレンジのバンダナを頭に巻いた少年。
少年が右手のひらを天へ掲げると、金色に輝くオーラで形成された巨大な手が現れた。
バカでかい音を立てながら衝突する青い龍と巨大な手。

「ぐっ……うおおおお！」

最初はバンダナの少年が押され気味だったが、雄叫びと共になんとか持ち直しボールを右手に収める。

「クッソ、止められたか！やるじゃねぇか！円堂！」
「染岡こそ！いいシュートだったぞ！」

そんな超次元的攻防の後、二人の少年はお互いを褒め称える。その様子を見て俺は思わずため息をこぼし、心の中でこう叫んだ。

身体能力チート貰っても転生先が超次元だったら意味ないだろ！

君のヒロイン決まりね。あ、ＴＳ転生者だからｗｗｗ

拝啓、前世の父さん、前世の母さん、あとバカ。こちらはうららかな春日和となりました。お元気でしょうか？私は今、住宅街を陸上選手顔負けのスピードで爆走しています。

「うおおおおお！新学期早々に遅刻はまずい！唸れおれの右脚！全てを屠れ俺の左脚！だあああ間に合えええ！っと近道こっちぃ！」

高さ５メートルはある塀を飛び越え、ストンとキレイに着地する。いつもは使わない、というか茨の道過ぎて使えない近道だが、背に腹は代えられないということで、使うしかない。

柵を飛び越えた先にあるのは今はもう使われていない廃工場。超オンボロだけどいつから放置されるんだこれ。

「錆びが手にボロボロつくから嫌なんだよな……」

愚痴を溢しながら廃工場の壁をよじ登り、屋根の端に手が掛かったところで一度静止する。

一度深く息を吐いてから腕に力を込める。するとその反作用で体が宙に投げ出されるので、前に一回転し体勢を整え、そのままドンッ！という近所迷惑確定の騒音を立てながらも着地を決める。

「うっは、たっけぇ」

屋根のはしっこから顔をのぞかせてみると、ここから地面までかなりの高度があることが分かった。高いところはあまり得意ではない。覗かなきゃよかったと、普通に後悔した。馬鹿じゃねえの？

「って急がなきゃ！なんのためにここ使ってんだよ！遅刻しそうだからだろ！急げよ俺！」

自分で自分に喝を入れ、視線を俺の通う中学校の雷門中へと移す。俺の目測だとここから雷門中への距離は１ｋｍ以上、いや遠い。これ行けるか？前行けたから行けないことはないだろうけど。

「っし！亭慈（ていじ）源（げん）、行きまぁぁぁぁす！」

視線は雷門中を見据えたまま、屋根の上を走り幅跳びの助走レーンかのように駆けてゆく。あと一歩踏み出してしまえば足が空を踏む、というところで脚を折り曲げ、溜めの動作に入る。

「ふんッ！」

解放。バネのごとく俺はぶっ飛んだ。

「あ゛あ゛あ゛あ゛あ゛あああああ！待ってやっぱムリ高いいいいい！」

後悔先に立たず。寝坊なんてしなきゃこんな地獄見ずに済んだのになあと、白目を向き滝のように涙を流しながら思った。

そのままおおよそ６０ｋｍ／ｈ（おっぱいの感触）くらいの風圧を浴びること約一分、雷門中が見えてきた。

「ヒィィィィ！あ待って着地しちゃう心の準備できないィィィ!?」

着地予定点は校門、少しずつ減速するんだ俺。落ち着け俺、平常心だ。前回遅刻しかけた時だってなんとかなっただろう？じゃあ大丈夫だ。行ける。

「ぶべらっ！」

駄目でした。勢いはそのまま顔面から地面に衝突してしまう。

「ふがががががが」

アスファルトの道を顔面で抉りながら、なんとか勢いを殺す。これ摩擦で顔焦げたって絶対。蒸気出てるもん。

「いでぇ……」

赤く腫れた鼻をさすりながら体を起こすと、顔に貼りついていたアスファルトの破片がポロポロと落ちてゆく。幸いなことに顔は焦げていなかった。

「急がねぇと遅刻しちまう……」

次の瞬間、始業時間のチャイムが鳴った。はい遅刻。俺の命を掛けた苦肉の策は水の泡。ふざけんな。学校の一部破壊してまで間に合わせようとしたのに。

「新学期早々から遅刻とは、度胸あるね～」

よろめきながらも歩き出そうとしたその時、背後から聞き慣れた声が一つ。振り返ると、そこに立っているのは制服を身に纏った小柄な少女。

「うっせ、寝坊したんだよ」

「源のことだから、そんなとこだろうとは思ってたよ」

「てか、お前もここにいるってことは遅刻だろ」

「あ、それに気づいちゃう？」

「気づかない訳ねーだろバカが」

目の前のバカは今世での俺の幼なじみ、鹿目（しかめ）優（ゆう）。なんの因果か、前世で仲の良かった幼なじみと同じ下の名だ。

名字は違うし、性別も違うのに、時々このバカの顔が前世のバカと重なって見えるのが最近の悩みだ。

「優も寝坊か？」

「ハッ、ボクは君と違ってそんな間抜けなことしないよ」
「いちいち煽らなきゃ気が済まんのかお前は……じゃあなんで遅刻したんだよ」
「えっ……あー、っと……それはぁ……そのぉ……」

遅刻の理由を尋ねた途端に動揺しだす優。人に言えないくらい恥ずかしい理由なのか？おねしょでもしたのだろうか……
「まぁなんだ、言いたくなければ言わなくていいぞ」
「あっ、ううん！違うの！言いたくないわけじゃないんだけどね……」
「じゃあ言えよ」
「えっ……うぅ……」

今度は顔を赤く染めて俯いてしまった。何なんだコイツ。
「……と…い……た…」
「アァ？声ちっちゃくて聞こえねぇよ」
「源と！一緒に登校したくてずっと待ってたの！……なのに、源全然来ないんだもん。気づいたら時間になっちゃってて……それで、遅刻した」
「は？……ッぷ、ハハハハ！」

目尻に涙を溜めながら、もうどうにでもなれと半ばやけくそな声量で優が叫ぶが、だんだんと尻すぼみになってゆく。俺は思わず爆笑してしまった。
「な、何で笑うのさ！流石に怒るよ！」
「いや、フフっ、すまん、おもったより、フッ、理由が可愛らしかったもんで。……お前、マジでバカだなぁ」
「カッチーン！あーあー、もうかんっぜんに怒っちゃいましたー。何でそんなこと言うの？さっき着地ミスって顔面から行ってたくせに」
「なっ!?お前見てたのかよ！」
「そりゃあ勿論。なんなら、心の準備できないー、って叫んでるところから見てたよ。いやー、あれは見事だったね。見事すぎるチキンっぷりだったよ、全く。ププッ」
「てっめ……今のままでもねえそのタッパ、更に縮めてやろうかマジ

で」
「暴力はんたーい！ぶーぶー」
　ギャイギャイと言い合いながら、校舎へ向かって歩く。俺たちは今日から中学2年生。学年が変わって、俺の日常にも何か変化が起こるのではないかと思っていたが、全然そんなことは無さそうだ。
　変化といえば、サッカー部の新入部員来てくれるかなぁ……人数が増えればグラウンドで練習することすらできない現状も変化するだろうに……

◆

「それで二人揃って先生に叱られてたのか？はっ、バカだなーお前ら」
　あの後、校舎に入ったら鬼の形相した担任が廊下で待ち構えていた。どうやら俺がアスファルトの道を破壊しているところと俺と優が喧嘩しているところの一部始終を目撃していたそうで、メチャクチャに怒られた。
　そして現在、そのことを俺と同じサッカー部の部員、半田真一に笑われている。は？うざ。
　横にいる優を見ると、彼女も頭に来たようで額に青筋が浮かんでいる。
「うるせーよ。半田、お前はさっさと必殺技使えるようになれ」
「そーだそーだ」
「うぐっ……あのなぁ、お前らそう簡単に言うけどさ、必殺技ってマジで習得すんのムズいんだぜ？それに、亭慈だってまだ必殺技使ったことないじゃんか」
「使う必要がないからな。使おうと思えば使える。俺が必殺技使ったらお前ら絶対に勝てないじゃん。ハンデだよ、ハンデ」
　そう言って半田のことを煽ってやると、ぐぅの音も出ないようで、

歯を噛み締め悔しそうにこちらを睨んでくる。
　ま、今の俺の発言普通に嘘だけどな！おれ必殺技なんて使えねーよ！ていうか使えないのが普通だろ！なんで染岡はボールから龍が出せるの？なんで円堂は右手からデカい右手が出てくるの？おかしくない？おかしいよね。ふぇぇ……超次元すぎるよぉ……
「クッソ……それで納得出来ちまうお前の実力が恨めしいぜ……」

熱血部長と新入部員。副部長は俺。あとエーストライカーも俺だっつってんだろ！

「だ、か、ら、マイナス3からマイナス4を引いたら1だってつってんだろーが！マイナス7にはならない!!」

「はぁぁぁ？マイナス3から4引いてるんだからマイナス7じゃん!!なんでちがうの!?」

今なら夜神月の気持ちがよく分かる。言っても分からぬ馬鹿ばかりだよクソが。しかもこのバカ勉強教えて貰ってるってのに逆ギレしてきやがった。ぶちのめす。

「どうせ解けないのに、亭慈も鹿目もよくやるよな」

「半田うるさい。解けるまで教えてもらうからいいの」

「喋んな半田。解けるまで教えるからいいんだよ」

「ほんと仲良いなお前ら……」

「「そりゃそうよ」」

優と声が重なる。思わず優の方を見てみると彼女も同じことを考えていたようで俺の方を見つめていた。それがなんだかおかしくてつい笑みが溢れてしまう。

「幼なじみだしな」

「幼なじみだからね」

「……なぁ染岡、こいつらマジで付き合ってないのか？」

「あぁ、残念ながらマジだ」

「マジかよ」

俺と優の方を睨み付けながらコソコソと何か言い合っている二人。

何の話してんだコイツら？

「ん、何の話してるの？」
「べつに大したことじゃねぇ、お前らの悪口言ってただけだ」
「鹿目はバカだし亭慈はすぐキレるってな」
「は？殺す」
「落ち着け優、いくらなんでもそれは俺も手伝おう」
「訂正、鹿目もすぐキレるし亭慈もバカだった」
「２回殺す」
「ステイだ優、２回じゃ足りねぇよ」

体から溢れるドス黒いオーラが部室全体を飲み込みそうになったちょうどその時――――ビシャアアアアアン！
「新入部員だ!!!」
「うっっっっっさ」
ばかくそデケェマジでうるさい騒音を立てながら開いた部室の扉。扉を開いたのは我らが雷門サッカー部部長、円堂守だ。
そしてマッッッッッッジでうるさい。ピシャリ！とかじゃなくてもうビシャアアアアアン！だよ？あぁぁ鼓膜ないなるううう！
「おいおい円堂、開口一番からそれか。楽しみなのはわかるけどよ」
「そうだぞ円堂。鼓膜が無くなった」
「うっ、ごめん……」
「ねー円堂、新入部員は何人なの？」
「よく聞いてくれたな鹿目！新しく入る部員の数は四人だ！」

新入部員の数は４人、俺たち２年生と合わせて８人だ。

「試合するためにはあと３人足りないな」
「なに、あとたったの３人だ。ちょっと頑張って勧誘すれば直ぐに集まるさ」

どんな奴が入部してくるのか、今から楽しみだ。扱き甲斐があるやつがいいなぁ……

◆

「うっしそんじゃ、一番右の君から順番に自己紹介たのむわ」

教室に置いてあるものと同じ背もたれまで硬い木製の椅子に腰を掛けつつ、横一列に並ぶ新入部員達に自己紹介を促す。

「はい！少林寺歩です！ポジションはＭＦです！」

元気良く返事をしたのは纏めてポニーテールにしている後ろ髪と前髪以外スキンヘッドの少年。どんな髪型してんだよ

「栗松鉄平でやんす。ポジションはＤＦでやんす」

お次は特徴的な語尾な前歯少年。そして頭の形が栗。どんな形してんだよ。

「宍戸佐吉です。ポジションは一応ＭＦやってました」

比較的普通な見た目なオレンジボンバーアフロ少年。いや髪色オレンジの時点で普通なわけないんだが。

「か、壁山塀吾郎ッス！ポジションはＤＦっス」

最後は下っ端口調の深緑顎髭アフロ少年。一年坊の分際で俺よりデケェ。こいつはかなり強力なＤＦとして活躍してくれそうだ。

「おーけー、自己紹介ご苦労さん。俺は副部長の亜慈　源だ。ポジションはＦＷだけど基本的どこでも行けるぞ。そんで、さっきから動きだけでやかましすぎるコイツは部長の円堂だ」

そう言って瞳が宝石箱のように輝いている円堂の方に目配せをすると、待ってました言わんばかり口を開く。

「円堂守だ！ポジションはキーパーで、この雷門サッカー部の部長だ！よろしくな！　よーし皆、早速サッカーやろ――――「気が早えよダボハセ」あだぁ!?　何すんだよ亭慈！」

「まだ部員全員の紹介終ってねぇだろ。ごめんな一年達、部長がこんなアホ野郎で」

新入部員が来て嬉しいのは分かるが浮かれ過ぎなんだわ。部長なんだからしっかりしてくれよダボハセ。の念を込めて円堂の脳天にチョップを決める。

「あぁそっか、悪い悪い。完全に忘れてたよ。ハハハ……」

「ほんとしっかりしてくれよ……俺は半田真一。ポジションはＭＦ、よろしく」

「染岡竜吾。ポジションはＦＷで、雷門中のエースストライカーだ！」

たった今聞き捨てならない発言をしたのは俺と同じポジションの自称エースストライカー、染岡竜吾だ。

「は？エースストライカーは俺だが？お前未だに円堂のゴッドハンド破れてないだろうが」

「アァン？」

「もー二人共、一年生の前で喧嘩なんてやめてよね。みっともない。あ、私はマネージャーの木野秋です。よろしくね」

染岡とバチバチとガンを飛ばし合う俺。こうなると誰かが止めに入るまで終わらないことがほとんどだから面倒くさい。長期戦になることを危惧し、すかさず仲裁に入ってきた少女はマネージャーの木野秋だ。

「同じくマネージャーの鹿目優でーす。よろしくね～」

俺の膝に乗っかりだらけきった表情で手をひらひらと振る優。はしたねぇなこいつ。

「よし！これで全員分の紹介が終わったな！それじゃあ皆！今度こそサッカーやろうぜ!!!」

「分かった。分かったから声のボリュームを抑えろ。耳がいてぇ」

誰かこの熱血部長を鎮めてくれ……

特訓、それすなわち特訓

一年生達のユニフォームが届いたので、今日から特訓を始めようと思う。

「始めるつっても、今回は様子見程度で済ますがな」

「亭慈さん、特訓って言ってますけどこれどこに向かってるでやんすか？」

俺の横を歩く栗松がそう尋ねてきたので、一度歩みを止め、皆がいる方を振り返る。

「河川敷だ」

「河川敷い？どうしてそんな場所へ行くんでやんすか？」

雷門中にはグラウンドが設備されているのに、それをなぜ使わないのか。一般的なサッカー男児ならば当たり前に抱くであろう疑問を浮かべる栗松。

俺に変わって半田が栗松の質問に答える。

「俺達サッカー部の人数はたったの８人、ついこないだまでは４人だった超小規模クラブ。そんなんだから、グラウンドの使用許可が降りないんだよ。だから、十分に特訓できる場所に移動してるってわけ。河川敷にはグラウンドがあるからな」

「そーいうこった、ま、安心しろよ。確かに行き先は河川敷だが、半田の言った通り十分に特訓できる場所だからさ。それも、お前らを筋肉痛で身動き取れなくさせる程度にはな」

口が三日月に裂け、所謂不吉な笑みという奴が溢れてしまった。染岡がドン引きしているが、あとでしばこうと思う。

「ええこわ……副部長、何するつもりなんですか……？」
「それはついてからのお楽しみってことで。まぁでも、さっきも言ったが今回の特訓は様子見程度だ。そこまで身構える必要はねぇよ」

肩を抱いて体を震わせる宍戸の背中をポンポンと叩く。何度も言うが今日は様子見程度の特訓だ。そこまでハードなものではない。それこそ部活初日にして一年生達が死んでゆく、なんてことは絶対にない、はずだ。

河川敷に着くと、トイレに行っている壁山を待ちきれず、先に出発していた円堂が既に手にグローブを嵌めた状態でゴール前に立っていた。

「おーい！遅いぞお前ら！早くサッカーやろうぜ！」
「全く、円堂君ったら……」

流石に木野もこれには呆れた様子でため息をついていた。ホント、いつも円堂のお世話お疲れ様です。今度メシでも奢ってあげようかな。

「いつも通りのサッカーバカっぷりだね～、円堂は」

いつの間にか俺の隣へと位置づけていた優が間延びした口調でアホっぽく笑う。お気楽なやつだな。
俺は木野と同様にため息を漏らし、円堂に負けないデカい声で叫ぶ。

「だからお前は気がはえーんだよ円堂！あと今日の二年生は一年生のサポート役だからグローブは要らねぇ！」

「ええー!?何でだよ!・せっかく新しく入部したやつらと一緒に特訓出来るのに、サッカーやんないのかよ!」
「なんでもだ!・いいからやるぞ!・さっさとそのグローブ外せ!」
「ちくしょう、分かったよ……」

渋々といった感じでグローブを外す円堂。その表情はとても怪訝そうで到底納得しているとは思えなかった。こうなると、練習にも支障をきたしてしまいそうだ。
ったく、しゃーないなぁ……
「おい円堂!……今日の特訓は一年生も混ざるってことで何時もより控え目にして、早めに打ち切ろうと思ってる」
「! それって……!」
「余った時間は、お前が好きに使っていいぞ」
「本当か!?いよっしゃー!!」

遠回しにサッカーしようぜと伝えた途端にはつらつとしだす円堂。うーん、この扱いやすさよ。

「……半田さん、部長と副部長っていつもあんな感じなんですか?」
「あぁ、残念ながら。円堂はいつも亜慈にいいように使われてるよ」
「うわぁ……」

半田からこれが日常の風景だと聞かされ、宍戸が可哀想なものを見る目で円堂を哀れむ。やめてやれよ宍戸。

「よーし!・そうと決まれば早速特訓だ!・皆、一度こっちに集まってくれ!」

円堂がそう呼び掛けると、グラウンド内に散らばっていた部員たちがコートの脇にあるベンチへと集まってくる。

「今から今日のトレーニングメニューの説明をする。優、ボード」
「はいは～い……っと、ほいドーン」
あいも変わらず気の抜けている優が肩に掛けていたトートバッグをガサゴソと漁りだし、手に小さめのホワイトボード持って見せびらかすまで約１５秒、トロいなコイツ。
「じゃ～ん、今日の特訓内容が書いてあるホワイトボードで～す」
「俺の口からも説明はするが、基本的にこのボードに書いてあることが全てだ。何をすればいいか分からなくなったらこいつを見るといい」
「副部長、すごい字がキレイですね」
「んふふ、そうでしょそうでしょ。源はずーっと前から字がキレイなんだよねー」
「ありがとう少林寺、でも何故そこに反応した。文字の綺麗さより特訓の内容を見てくれ」
俺の字がキレイなのは当たり前だ。前世含めたらもうアラサーの年ですよ。そいで字が汚いとか無いでしょう。
そしてなんで優が誇らしげにしてるんだよ。お前のこと褒めてる訳でもないのに。なんならお前めちゃくちゃ字汚いだろ。円堂には負けるがそれでもかなり汚いぞ。
「今日は一年一人につき二年が一人サポート役に就く。つまりは二人一組のペアになって特訓するってことだ。んで誰に誰がサポート役として就くかっていうのは……まぁ適当に決めてくれ」
「亜慈お前……その変なところでいい加減になる癖はどうにかできないのかよ」
「無理、諦めろ」
「源は昔っからこうだからねぇ～」
別に何もマズいことではない。最初は全員で走り込みだから、そん

ときに走りながらでもペア考えればいいだろ。とまぁこんな楽観的なこと考えているのがいい加減ってことなんだろうけど、どうも治す気にはならないんだよな。なにか不便があるわけでもないし、別にいっか、みたいになる。

「まずは手始めに走り込み。俺が先頭走るから着いてきてくれ。んじゃ行くぞー」

◆

場所は変わらず河川敷、しかし時刻は打って変わって夕暮れだ。額から伝う汗を拭い、一息ついてから口を開く。

「っし、今日はこんなところかな。皆、お疲れ様」

「……かはっ……」

「むり……からだがうごかない……」

「なんで先輩達はそんなにピンピンしてるんッスか……？」

「様子見っていうのは……嘘だったんでやんすか……」

俺が終了の合図を出すと、次々に力無く地面へ倒れこんでいく一年生達。なんか、入学したての頃を思い出すな。

「嘘じゃねーよ。いつもの亭慈ならこの倍の量のトレーニングを要求してくるぞ。おまけに数キロある重り付けられたりしてな」

「俺達も最初の頃はお前らみたいにすぐへばってたよ。まぁでも、直ぐに慣れるさ」

「おーいお前ら！　サッカーやろうぜ！」

そんな一年生とは対照的で、涼しい顔をしている2年生達。一年生達は信じられないといった感じの視線を俺達に送っているが、お前らも近いうちにこうなるぞ。あと円堂はうるさい。死にかけの一年を労ってやれよ。

「こ、こんなの耐えられないっス……」
「俺もでやんす……」
「これが続くなら……おれ、多分サッカー部辞める……」
「同じく……」

一年共がなにやら不穏な事を言っている気がしなくもないが、まぁ無視しよう。

「円堂、シュート練頼むわ」
「おうっ！任せろ！」

◆

雷門中サッカー部の部室、そこには二年生達の姿はまだ無く、一年生だけが集っていた。
少林寺がため息をついて口を開く。

「絶対に続かない……って思ってたのに……」
「あんな風に言われたら……なぁ……」

四人が回想するのは放課後、河川敷で行われる地獄のような特訓中に掛けられた先輩からの言葉の数々。

『おう宍戸！おめぇやれば出来るじゃねぇか！その調子だ！』
『いい感じだぞ少林。これならすぐに俺たちの実力に追いつけるかもな？』
『いいぞ栗松！お前ならもっと行けるハズだ！さぁ来い！』
『壁山、お前のポテンシャルは一年生の中でも随一だ。お前は俺が絶対に強くしてやるから、覚悟しておけよ？』

「辞められるわけないでやんす……」
「ッスねぇ……」

サッカー部での特訓はとてもハードで、2年生の先輩達もとても厳しい。しかし、褒めるところはとことん褒めてくれるので、なんだかんだ言って一年生達のモチベーションは常に高いところにあるのだ。

「なんの話してるのー？」
「おわぁ!?し、鹿目さん……。いつからいたんですか……」
「ちょうど今来たばっかだよー。驚かせるつもりは無かったんだけど、ごめんね」
いつの間にか開かれていた部室の扉。マネージャーの鹿目がスポーツドリンク用の粉を箱ごと抱えながら、一年生達の会話に首を突っ込む。

「こんにちはッス鹿目さん。先輩達が褒め上手っていう話をしてたっス」
「褒め上手……あー、そういえば源がなんかやってたなぁ。一年生の育成にあたってのなんちゃらかんちゃらみたいなの」
「亭慈さんでやんすか？」
「うん。源って結構仲間思いだからね～。君たちのことも色々考えてくれていたっぽいよ」
「へぇ～、あの亭慈さんが……」
思わず感心の声をを漏らす一年生達。あの鬼畜すぎるトレーニングメニューを考え、それを容赦なく実施させてくるあの鬼の亭慈がそんなことをしていたとは、思ってもいなかったのだろう。

「亭慈先輩っていつもは厳しいでやんすけど、案外いい人なのかもしれないでやんすね」
「そーそー、源は案外いい人なんだよ～。ふふふ」

当人の知らないところで好感度が上がる亭慈源であった。

どいつもこいつも超次元なやつばかりで俺は泣きそうだよ。それと転校生

一年生達が入部してから、それなりに時間が経った。最初こそすぐに音を上げていた一年坊共だが、数ヶ月もすれば特訓に慣れ、余裕綽々とまではいかないがまぁ着いてこれるようにはなった。

「よっしお前ら、そろそろ時間だ。今日はこのへんで終わるぞ」

「だー！やっと終わったー！」

「流石にまだ疲れるッス……」

「当たり前だ、この運動量で疲れねぇやつはいねぇよ」

「でも亭慈さんは息も上がってないでやんすよ？」

「あいつはもう別次元の生き物だ。無視しとけ」

「なんだ染岡、喧嘩してぇのか？」

俺からしてみればお前らのほうが別次元なんだよなぁ……染岡はドラゴン出るしドラゴンクラッシュ半田は訳わからん挙動でシュート撃つしローリングキック円堂は金ピカの右手出てくるしゴッドハンド……あれ？半田は普通にシュート撃ってるだけじゃね？

やっぱ半田は俺の味方かもしれん。いっちゃあ失礼だが、このメンツだと一番低次元だからな。

「ジグザグスパーク　おっ出来た、おーい！亭慈！円堂！染岡！新必殺出来たー！」

「半田、お前は今日から俺の敵だよ」

「ハァ？何いってんだよ亭慈、そんなことよりも見ててくれたか？俺のジグザグスパーク！」

あぁ神様、あなたはなんて無慈悲な方なのですか？セーフ判定下した直後にそれはないでしょうよ。くそったれがよ。

「俺は見てたぞ！すげぇじゃねぇか半田！遂にドリブル技も使えるよ

うになったんだな！」
「あぁ！ＭＦなのにドリブル技を一個も使えないっていうのもおかしな話だったからな！やっと完成してよかったよ」
は？俺は必殺技一つも使えないんだが？ポジションに拘らずとも使える必殺技が一つもないんだが？
これ半田くん俺のこと泣かせに来てるよね？かなり前に、はやく必殺技使えるようになれよｗって毒吐いたこと根に持ってるよね!?
「ふっ、また一歩先を行かれちゃったね」
いつの間にか背後へ忍び寄って来ていた優が俺の肩をポンポンと叩いてくる。は？うざ。
「うっせーよ。基礎体力じゃあ俺に分がありすぎっからまだイーブンだ」
「いいわけおつー」
「言い訳じゃなくて事実だ！」
「相変わらず仲いいねー。二人共」
若干呆れも混じっているような声色で苦笑を溢したのは、最近入部した松野空助、通称マックス。
入部理由がここなら退屈しなさそうだから、というなんとも強キャラっぽいものだったので、多分コイツは主要キャラだ。
「そりゃあ幼なじみだからな。それよりもどうよ？サッカー部の特訓には慣れたか？マックス」
「うーん……慣れはした……かな？流石にまだキツいけどね」
もう一度言うが、マックスは最近入部したばかりだ。だというのにこいつ、もう特訓に慣れたと言いやがる。やっぱし超次元じゃない

かぁ！

「あそうそう、最近必殺技できたんだよねー。ちょっとやってみせたいからさ、相手お願い出来る？副キャプ」

「もう好きにしてくれ……」

「……流石に同情するよ。源……」

◆

転校生が来た。名を豪炎寺修也と言うらしい。

まぁバチバチに知り合いなんだが。

教室で豪炎寺と知り合いだということをポロッと口から零すと、円堂がとてつもない勢いで詰め寄ってきた。いやあの、近いッス。

何やら円堂、先日河川敷で小学生のサッカークラブと一緒に練習していたところを不良に絡まれたそうなのだが、たまたまその場に居合わせた豪炎寺に助けてもらったらしい。

その時の豪炎寺のシュートがとてつもなく強烈だったから、どうにかしてサッカー部に引き入れたいんだとか。

「多分勝手に入部してくるから変に勧誘する必要はないと思うぞ。あいつ、円堂に負けず劣らずの筋金入りのサッカーバカだからな」

「えぇっ!?そうだったのか!?」

「ごーえんじはクールなふいんき出してるけど、実は熱血タイプのサッカー野郎だからねー」

「ふいんき、じゃなくて雰囲気な。バカ露呈してんぞ」

「あー、あー、なーんも聞こえなーい。別にふいんきでも伝わるんだからいいじゃん。べー」

聞こえてんじゃねぇか。そう出掛かった言葉を飲み込み、円堂に向けて口を開く。

「気になるなら声掛けてみりゃいいじゃん。ほら、そこの席に座って

んだろ」
「あぁそっか！確かに！ちょっと行ってくる！」
「いってらっしゃ～い」

……なんつーか、本当に忙しないやつだな。豪炎寺に熱烈なアタックをかます円堂をボンヤリ眺めながら、そう思った。

◆

豪炎寺と出会ったのはもう一年近く前のことになる。
優と一緒に中学サッカーの全国大会の決勝の観戦に行ったときの話だ。
スタジアムに向かう途中、トラックに轢かれそうになってた女の子が居た。
俺はチート転生者だから女の子を颯爽と救助したわけなんだが、なんとその助けた女の子が豪炎寺の妹だったんだわ。
お前の妹が轢かれかけてんだど!?という旨の連絡を豪炎寺の妹、夕香ちゃんのケータイを使って豪炎寺本人に寄越すと、豪炎寺は自分が大会の決勝に出るチームのレギュラーなのにも関わらず、試合を放棄して夕香ちゃんの元へとすっ飛んできた。妹思いのいい兄貴だ。
しかし俺が取った豪炎寺へ連絡するというこの行動、正直やらないほうが得策だったと後悔している。
旗から見れば、あぁ、兄妹愛やなぁ……で済む話なのだが、豪炎寺の所属していたチームからしてみれば、全国大会決勝直前に試合ドタキャンして無傷の妹のところへかっ飛んでいくとか、たまったもんじゃないだろう。
何か大怪我をしたとかなら試合をそっちのけにポイしてもまぁしょうがないとなるのだろうが、無傷だったのだ、夕香ちゃんは。
いやはや、ほんっとーに申し訳ないことをしたな。豪炎寺のチームの人には、何だっけ、井戸から青龍みたいな名前の学校だった気がするけど。

だめだ、思い出せねぇや。
っと閑話休題、話を戻そう。夕香ちゃんの元へ爆速で駆けつけてきた豪炎寺だが、俺を見るやいなやぶちかましてきたのはスライディング土下座。ここだけの話ドン引きした。
『妹を助けてくれてっ……！本当に……！ありがとう……！』
そう言って土下座したまま涙を流す豪炎寺の姿があまりにもみっともなかったもんなんで、いやちょっと重いっす。それは重いっす。みたいな感じで顔を上げさせた。
俺は当たり前のことをやっただけだ。ちょーっと動けば助かる命があるんだったら、ちょーっと動くくらいだれでもするでしょう？別に大したことじゃない。それはそれとして感謝されることではあるが。
夕香ちゃんを一応病院で見てもらおうってことになってそのまま豪炎寺パパが運営する病院に行った。
そんで移動している間に豪炎寺のサッカー事情を聞いたり、逆に俺のサッカー事情を話したりして、かなり意気投合した。そして豪炎寺の話を聞いている内に一つ分かったことがある。
コイツ、円堂と合わせたら化学反応が起きるな、と。そして今まさにそれが成されようとしているわけなのだ。正直クソ楽しみ。
でもって、夕香ちゃんを病院まで送り届けたら、なんか豪炎寺のオヤジらしき人が出てきて、この人にもドン引きするくらい感謝された。血筋か……？
その後、夕香ちゃんの体に何も異常がないことを確認が取れたので、普通に家に帰った。その日は夕焼けがとてもキレイだった覚えがある。
あの日以来、豪炎寺とは一度も会っていなかったのだが、まさか雷門中に転校してくるとは思いもしなかったな。
この先がどうなっていくのか、今から楽しみだ。

日本一に勝たなきゃ廃部ってマジ？マジですか。そうですか。ふざけんな。

練習試合をすることになった。相手はなんと帝国学園。言わずとしれた超強豪校だ。中学サッカーの全国大会、フットボールフロンティアの絶対王者で、４０年間ずっと優勝し続けているとのこと。

なんでそんなバケモン中学と練習試合することになったのかは分からないが、どうやら負けたら廃部らしい。理不尽すぎてウケる。

「そもそも部員が足りねぇから試合以前の問題なんだよなぁ……」

元からいた8人と最近入部したマックス、それとちょうど今入部届を提出しに行っている豪炎寺。合計すると十人になるのだが、サッカーの試合に必要な人数は１１人。試合をするには一人足りない状態だ。

「どーしたもんかねぇ……」
「それなら心配なさそうだよ」
「おわ、お前いつからいたんだ」
「今来たとこー」

ぬるっと現れた優。いつも気付かない内に隣いるんだよなコイツ……

「心配なさそうって、どーいうことだよ？」
「なんかねー、風丸くんが助っ人で試合に入ってくれるらしいよー」
「マジで？」
「まじまじ」

風丸というと、陸上部に所属している2年生の風丸一朗太のことだ

ろう。
風丸は円堂の幼なじみで、ときたまサッカー部の特訓に混ざって参加しては「ここの練習ストイック過ぎないか……？」程度の感覚で特訓をこなしているまぁ超次元なやつだ。
その風丸が助っ人として練習試合に参戦してくれるらしい。ありがたい、願ってもないことだ。

「でも、風丸って陸上一本のイメージがあるんだが、よく助っ人になってもらえたな」
「円堂が直々に口説いたみたいだよ」
「あー、納得」

円堂ってよくわからんがこう、人を惹き付ける魅力？みたいなのがあるんだよな。リーダー気質があるというかなんというか……
ともあれ、これで試合前から廃部確定っていう最悪の事態は避けることができる。風丸様様だな。
つっても、相手は日本一のチームだ。正直勝てる気がしない。だがしかし負けたら廃部、俺の二度めのサッカー人生が早々に終幕してしまうのでどうにかするしかない。
俺たちがどれ程まで帝国相手に戦えるのか全く見当もつかないが、とにかくやるしかないだろう。
練習試合まであと一週間。この期間を如何に活用するかによって、俺たちの廃部の危機がどちらの方向に傾くのかが決まる。
取り敢えず、一人ずつの特訓メニュー作るところから始めるとするかね。

「今日は徹夜だな……」
「え、なんで？」
「ちょいとトレーニングメニューの見直しをな。豪炎寺と風丸の分も1から作らにゃならんし」
「ふーん、そっか。……無理はしちゃだめだよ？」

「分かってるよ。心配してくれてサンキューな」
「えへへ、ならよし」
お前は俺の母ちゃんかとツッコミたくなったが、これも彼女なりの優しなのだろう。
優が俺のことを心配して気遣ってくれている。そう考えると、ちょっと胸が暖かくなった。

◆

一週間が経った。それすなわち、今日が帝国学園との練習試合の日だということだ。
グラウンド周りにはたくさんのギャラリーがいるが、その多くが俺達が負けるところを見に来ていると思うと……かなしいなぁ……
クソデカいバス？みたいな乗り物でダイナミック入校を決めきてきた帝国学園。
レッドカーペットを敷地内まで広げ、何故かサッカーボールを持っている帝国学園の生徒たちをカーペットの脇に侍らせながら、帝国サッカー部のメンバーがこちらのグラウンドへと歩みを進めてきた。
訳がわからない光景だが文字に起こすともっと訳がわからない。ギャグじゃんこんなん。
天気はどんよりとした曇り空。こういう日は気持ちも自然とどんより落ち込んでしまう、かもしれない。俺はそんなことないが。
「よう豪炎寺、調子どうよ？……って聞くまでもなかったな」
「亭慈、あぁ、言うまでもなく最高だ」
隣に居る豪炎寺に今日のコンディションを尋てみたが、見て取れるほどに調子が良さそうで聞く必要もなかったみたいだ。
瞳に炎を宿し獰猛な笑みを浮かべている豪炎寺。やっぱりこいつ

はサッカーバカだな。でなきゃ廃部がかかったこの状況を、こんな表情で楽しむことはできないだろう。

「雷門中サッカー部の円堂守です。練習試合の申し込み、ありがとうございます」

円堂の居る方に目を向けると、円堂にしては落ち着いた様子で帝国学園のキャプテンに握手を求めていた。ふぅん、偶には部長らしいこともできるじゃん。

「初めてのグラウンドなんでね、ウォーミングアップしてもいいか？」
「ど、どうぞ」

……握手ガン無視かよ。いけ好かねぇ野郎だな。なんだ、あれか？強者の余裕ってやつか？くっだんな。握手くらいしろよ。礼儀だろうが。

「源、顔がいかつくなってるよ」
「ありゃ、顔に出てた？」
「うん、人殺せそうだった」
「やば」

えっ、俺の人相……ヤバすぎ？
腑抜けた会話を優と交わしつつ、帝国の奴らがグラウンドでウォーミングアップしているところを眺める。
シュートの練習をしていたり、リフティングの練習をしていたり。その様子から分かるのは帝国学園サッカー部の名は伊達じゃないということ。一人一人のレベルがとても高い。
ますます勝てる気がしないな……

「……なんというか、すごいんだろうけど……」

ん？

「俺達がいつもやってる特訓の準備運動の方がもっとすごいっス」

あれ？

「相対的に普通に見えちゃうよね」

あれれのれー？

ふーん……え？何言ってんのお前ら。いやいや……え？冗談でしょ。これが普通に見える？嘘だろ？え？えぇ……

「俺、なんだか行ける気がしてきたでヤンス」

「奇遇だな栗松、俺もだ」

「皆……！よーっし！俺たちならきっと、いいや絶対に勝てる！……お前ら！サッカーやろうぜ！」

『おー！』

知らないです、俺。こんな化け物たちを育てた覚えなんてありません。ええ、本当ですとも。オデ、ウソツカナイ、ゼッタイ。

「亭慈！」

「……なんだ」

「俺達がここまで成長できたのは間違いなくお前のおかげだ！ありがとうな！」

「……そーいうのは勝ってからにしろよ。それで負けたら恥ずかしいぞ」

「へへっ！そうだな！」

あー……なんかもう、俺も勝てる気がしてきた。

こうなったら相手が日本一なんてこと知ったこっちゃねー！超次元上等！やったらぁよ！

さぁ、かかってこいよ帝国学園！

……その前にトイレ行こう。色々と吐き出したい。

ＶＳ　帝国学園　前編

なにやら、俺がトイレへ吐瀉りに行っている間に一触即発的なイベントがあったらしい。ウォームアップをしている帝国部員のシュートが円堂目掛けて放たれたんだとか。そんでそれを円堂が普通にキャッチしたせいで、俺が戻って来た時にはギャラリーのどよめきがうるさくてしょうがなかった。

俺に変な期待かけんなよ。部長がすげぇなら副部長もすげぇみたいなのやめろ。マジで。

「これより、帝国学園対雷門中学の練習試合を始めます！」

審判よく通る声がフィールド上に響き渡った。

はぅぅ、緊張してきましたぁぁ。は？きっしょ。

「ではキャプテン、コイントスを」

そう言って審判がコイントスを促したが、帝国のキャプテンはそれをシカトして自分のポジションへ歩き出す。

なんだなんだ何してぇんだ。

「なっ……鬼道くん、コイントスを！」

「必要ない。好きに始めろ」

ほーん……そういうことね。おっけーおっけー。……いやおっけーじゃねぇよ。何なんだよあいつ。腹立つなぁ。なんでマントしてんの？そのゴーグルは何？何故している？

「挑戦です！これは我が雷門に対する、帝国の挑戦です！」

マイク越しの少しジャミった声、いつの間にか現れていた実況の……名前なんだっけ、たしか……いや無理思い出せん。

「私実況を務めさせて頂きます、将棋部の角間、角間と申します！」

あぁどうも。ご丁寧に自己紹介してもらっちゃったよ。角間ね。はい覚えた、絶対わすれないよ。多分。

「んだよ、あの鬼道とか言うやつ。すかしやがって」

「落ち着け、染岡。気を乱していてはプレーに支障が出る」

「そうだぞ染岡。気持ちは分かるがそういうのは全部プレーに出る。一旦心を鎮めろ。ところであのゴーグル野郎クソムカつくんだ

がどうする？処す？処す？」
「お前のほうが頭に来てんじゃねぇか！」
怒り狂う染岡を落ち着かせていたつもりが、いつの間にか俺がブチギレてしまっていた。なんでやねん！
「この調子なら、亭慈も大丈夫そうだな」
「いいや、違うね風丸。あいつ、あーやっていつも通りに振る舞ってるけど多分内心はガクブルだぜ」
「え？そうなのか？」
「亭慈は見栄っ張りだからなー」
「ちょ、てっめーら風丸に余計なこと言ってんじゃねーよ！」
半田と円堂が風丸に変なことを吹き込みやがった。いやまぁ事実なんだが。内心超ビビってるよ？俺。
「もう、目の前には日本一のチームが居るっていうのに、ちょっとは緊張とかしないわけ？」
ベンチの方では、呆れたように木野がため息をついている。なんかいつもため息してますね。あ、俺達のせいか。ガハハハ！
「皆自由だね～」
木野の横に座っている優。いやお前が言うか？一番奔放だろお前。
「自由ですねー」
「きゃっ……どちらさまかな～？」
「お隣失礼してます！新聞部の音無春奈です！取材に来ました！あっ、鹿目先輩！今の声すごく可愛かったですよぉ！」
「う、うるさいなぁ……」
それな。分かってるね君。コイツ可愛いよな。まぁ本人には絶対言わねーけど。ぜっったいに言わねーけど。
「亭慈、試合が始まる。ポジションにつけ」
「え、もう？」
ちょっと心の準備が……って言っててもしょうがないか。
自分のポジションにつき、今一度チームのフォーメーション確認する。

染岡と豪炎寺のツートップで、普段ＦＷのポジションにいる俺が一つ下がってセントラルハーフに来ている。まぁ妥当かな。

◆

しばらくもしない内に、審判のホイッスルによって試合の開始が合図された。

キックオフ。ボールは豪炎寺から染岡、そして俺へとパスが渡って来る。

「頼むぜ！亭慈！」

「よしきた、任せろ！」

あれよあれよと言う間に始まってしまったｖｓ帝国学園。心の準備とか何もできてないけど、まぁなんとかなるやろ！速攻じゃい！

ボールをキープしたままフィールドを上がっていく。このままゴールまで一直線、って出来れば一番いいのだがそんな上手くいくはずもなく、帝国の選手が前に現れ行く手を阻んできた。

「ほいっ……と、染岡！」

相手のスライディングを上手いこと躱して、ゴール前まで上がっていた染岡にパス。染岡がそのままシュートの体勢に入る。

「喰らえ！ドラゴンクラッシュ」

どこからともなく現れた青い龍と共にシュートがゴール目掛けて放たれる。

「何!?　クッ……」

相手が油断していたのか、はたまた染岡のシュートが速すぎたのか、相手のキーパーは染岡のシュートに反応しきれず、そのままゴール。なんというかあっけないな。

「ゴォォォル！なななんと先制点を奪ったのは雷門中！染岡と亭

慈の連携による目にも止まらぬ速攻で、あの日本一の中学校、帝国学園から1点をもぎ取りました！」
「染岡！ナイスシュート！」
「亭慈こそ！ナイスパスだったぜ！」
お互いを称えながら染岡とハイタッチをする。んー、快感。この瞬間が一番ドーパミンがドバる。
「すごいです染岡さん！あの帝国学園から先制点を奪っちゃうだなんて！」
「おうよ少林寺！エーススストライカーの俺にかかればこんなもん朝飯前だぜ！」
「は？エーススストライカーは俺だが？」
「んだと!?」
エーススストライカーは俺だっってんだろうが！俺は副部長だぞ！お前よりも偉い！だから俺がエーススストライカーだ！
「二人共、今は試合中だ。喧嘩をするなら後にしろ」
「豪炎寺……わりぃ」
「すまん……」
普通に怒られた。豪炎寺ごめんよ。
「それと、誰がエーススストライカーなのかという話、もしや染岡と亭慈のどちらかで決着を付けようとは思っていないよな？」
そう言って不敵に微笑む豪炎寺。……こいつも大概だな。
「お～いお前らー！ポジションに戻れ～！」
「んお、すぐ行く！　……いいか！豪炎寺がいようがいなかろうがエーススストライカーは俺だ！異論は認めないかんな！」
そう吐き捨てて、自分のポジションへズカズカとした足取りで戻る。
さて、先制点はゲットした。このまま調子に乗って勝ち切ってしまいたいのだが……
ピーッという笛の音ともに再びキックオフ。ボールはフォワードの選手からゴーグル野郎、もとい鬼道へと渡り、こちらへと真っ直ぐ

攻め入ってくる。
真っ直ぐ攻め入ってくる、それすなわち俺の居る場をめがけて鬼道が突っ込んできているということ。
「しょっぱなからキャプテンとバッティングかよ。ついてねー」
「先制点を取られたせいでうちの連中が気を立ててるみたいなんでね！悪いが本気でやらせてもおう！　イリュージョンボール」
「へっ、んだよそれ、さっきまでは手ぇ抜いてたってこ――――どうええええ!?ボール増えたぁ!?」
瞬きをしたら鬼道のドリブルするボールが3つに増えていた。何言ってんだって感じだけど俺がみた情景を一字一句違いなく伝えただけだ。
「ってやば！　すまん皆！おもっくそ抜かれた！　おい待てこのゴーグルマント野郎ー！待たねぇとそのドレッド一本一本解してサラストヘアにすんぞ！いいんか!?いいんかオイィ！」
「ハッ！弱い犬ほどよく吠えるとは正にこのことだな！」
ファー！（沸騰）
アイツマジでぶち負かす！
「落ち着け亭慈！ペースを乱されるな！」
「わかってるっての風丸！おれも考えなしに突っ込むほど馬鹿じゃねぇよ！」
だから、次に対面した時がお前の最後だ。……覚えとけよー！
ディフェンスの奴らを次々と躱していく鬼道、あっというまにゴール前までたどり着いてしまった。
「デスゾーン、開始……！」
「円堂！気を付けろ！」
「ああ！」
俺の警告に対し、円堂はパシリと手のひらに拳を叩きつけて呼応した。
鬼道がボールを蹴り上げ、それを3人の選手がジャンプしトライアングルの形で囲い、ボールを中心に捉えたまま回り出す。
「「「デスゾーン」」」

紫色のオーラを纏ったボールが円堂に向かって放たれた。デスゾーンて名前怖すぎないか……？

「行けるよな!?円堂！」

「おう！任せろ！　ゴッドハンド」

金色に輝くゴッドハンドと怪しく紫色に光るのデスゾーン。光と闇が衝突する。

次第にボールの勢いは弱まり、円堂の手中へと何事もなかったかのように収まった。

「なっ……!?」

鬼道はまさか必殺シュートが止められるとは思っていなかったようで言葉も出ないようだ。

ざまーみろ！

円堂がしっかりとボールを両手でつかみ、相手のゴールを見据えて口を開く。

「さぁ！反撃開始だ！」